

古文書を読む会学習記録

作成日 令和元年10月25日

開催日	令和元年10月24日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センター会議室	出席人数	16名
講 師	真田 雅行氏	作 成 者	伊達 一雄
テーマ	第二学習 北搓聞略(大黒屋光大夫漂流記録)⑥		
概 要	<p>やっと願いが叶って女帝エカテリーナに謁見し帰国を訴えたが、確答は得られず待ち続ける光太夫のエピソードが続く。</p> <p>ある日太子に召されたが迎えが遅かったので太子の輿に乗って帰った。出迎えた方は「行啓」と思ったら光大夫だったので皆が肝をつぶし、どうしてこんな勿体ないことをしたのかと言われた。外国人でもこんなことをしてはいけないと諭された光太夫もその夜は身がほてって眠れなかったという。</p> <p>そうこうするうちに呼び出されやっと帰国を許される。「是ハ五月廿八日女王に拝せし時、即刻ヲホツカへ護送の事を命せられ、此節すでに船の用意を調ひし故なりしぞ」と明かされている。</p> <p>その後宮中に召され女王より煙草盆を賜る。さらに女王からの贖(はなむけ)として金牌や時規(時計)なども渡された。金牌は表に女王の像があり頸(えり)に掛けると説明されている。これを賜ったのはロシア人でも2人だけで、これを掛ければロシア本国は勿論所属の国に行っても「決して疎略にせざるとなり」という。</p> <p>小市、磯吉も銀牌を賜ったほか、新蔵、庄蔵も金50枚を下賜され、帰国までの滞留費用も出されるという厚遇であった。世話になった人からの贈り物も衣類から食糧まで実に多彩である。</p> <p>このあと光大夫らはモスクワに向い方々遊覧した後、イルコッカ(イルクーツク)に到着する。5月にやっと船の準備が出来たので、療養中の庄蔵を呼び出して出発間際に暇乞いををした。庄蔵は驚いて呆然とするばかりだったが、光大夫はその手を取り別れたら再び会うことは出来ないお互いの顔を見て最後の別れを告げた。「心よわくては叶はじと彼邦のならひなれば、つとよりて口を吸ひ思ひきりてかけ出せば、庄蔵は叶わぬ足にて立あがりこけまろび、大声をあげ小児の如くなきさけび悶えこがれける」という文は涙をさそうものがある。ロシアは日本との通商を望んでいたことは確かだが、漂流民に対する態度が極めてやさしく暖かいのは意外な驚きである。</p>		
次回予定	令和元年11月14日 10:00~12:00	於:区役所区民活動センター	第一学習 磯子区久木 堤家文書②